

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

入院した母さんは、日に日に老い、弱っていく。見舞いに行っても目を開けるのもつらそうで、なにもしてやれない。

「殺風景でしょ」

病室に二十四時間態勢で詰めている妹が言った。

「病室に花も飾っちゃダメなんだって」

部屋を見回して訊く。

「こんなんでも一日いくらくらいすんの？」

「花も飾っちゃダメなんだって」

おれの言葉を無視し、妹は悲しげな表情でくり返した。

そのときだった。

カシャツ。

シャッターが切られた。

「やめろよ、こんなときに」

おれは隣に立っているニコンに言った。

ニコンは目にカメラレンズが内蔵されている、家庭用の人型写真ロボット。おれたちが小学生だったころ、父さんが買ってきたものだ。ニコンとルーカスフィルムが共同開

発した特別モデルだから、外見や話し方はスター・ウォーズのC-3POそのもの。生産が追いつかなくなるくらい売れたヒット商品だ。

ニコンは言った。

「すみません、でもいまの顔は、お嬢様がこれまで一度も見せたことのない表情だったものですから、母上様の病生活のいい記念になると思いますて」

「だからやめろって」

「すみません」

ニコンに会ったのは久しぶりだが、相変わらずの読めないやつだ。人工知能とかいって、所詮このレベル止まり。キヤノンとスパイダーマンのコラボとか、ライカとドラえもんとか、あとからあとからいいのが出てきた。

「とりあえず、今日は一旦帰ろう」

おれが言うと、妹は首を横に振る。

「だって、いつかわかんないもん」

「いつかって、お迎えのこと？」

おれは少しだけ冗談めかして言う。

リラックスさせてやりたくて言ったんだけど、妹はおれを睨みつけた。

X

「チーちゃんが死んだときも、母さんこうやってずっと付き添ってたでしょ」

だから自分も、献身的なやり方を貫くのだと。後悔しないために。

チーちゃんは、妹が拾ってきた猫だ。おれには終生なつかなかったチーちゃん。老いたチーちゃんが寝たきりになつて危篤状態だった五日間、母さんと妹は交代交代、つきつきりで介護したそうだ。おれはそのときもう家を出て、結婚して別世帯だったから、よく知らない。ともあれうちで誰かが死ぬなんて、チーちゃん以来だ。まだ死んでないけど、でも、もうそのときが近づいているのは、母さんの様子を見ればあきらかだった。

「ところで父さんは？」

「家」

「どんな感じ？」

「まあ、普通。わたしよりこういうシチュエーションに慣れてるから、落ち着いてる感じ」

「ああ、あの年だと、周りの人がちよこちよこ死んでるからなあ」

「亡くなってからが大変なんだって言ってた。だから、い

まから無理してたらないって」

「ほら、父さんも言ってるだろ？ 今日帰ろう」

「嫌だ。一人にしたいくないもん」

「じゃあ、おれは帰るから、なんかあったらすぐ連絡して」

「わかった」

「なんか……いろいろやつてもらって、ごめん」

カシヤツ。

「おい！ こういうところ撮るなって」

照れくささをごまかすため、おれはニコンを強めに怒鳴りつけた。

「すみません。しかしながらわたくし、心が動いた瞬間にシャッターを切るようプログラミングされておりますもので」

（中略）

それから間もなくして、母は亡くなる。付き添っていた妹を含め家族は息を引き取る瞬間に立ち会うことができなかった。唯一ニコンだけが、その瞬間を動画に収めていた。葬儀後、遺された家族はニコンが作成したアルバムを見ながら母のことを懐かしむのだった。

それから丸一日、おれたち家族は取り憑かれたように母さんの写真を見つづけた。ソファに三人、きつきつに詰めて座り、ニコンがロールスクリーンに投射した写真や動画を見ては、わーわー言い合う。

「これいつの写真だっけ」

車の中、まだ若い母さんがハンドルを握り、後部座席におれと妹がむくれた顔でふんぞり返っている写真。

「全然憶えてない」

「父さんわかる？」

「いいや」

「こちらは二〇XX年のX月X日午後X時XX分の写真でございます。この日は母上様がプリンをお作りになり、お二人はとても喜んで固まるのを待ってらっしゃったのですが、冷蔵庫に入れて何時間か置いてもうまく固まらず、あえなく失敗してしまったのでございます。そしたらお二人、大変なブーイングで。こちらの写真は、母上様が仕方なくお二人を乗せて、ケーキ屋さんに向かっていてるところでございます」

「ああ、だから母さんの顔、なんか陰いのか」

「母さん、わたしたちのためにプリンなんか手作りしてく

れたことあったんだ」

妹はハツとして言った。

「さあ、憶えてない」

「プリンを作っていらっしゃる写真です」とニコン。

ぐちゃぐちゃの台所で、母さんがボウルになにかを混ぜている写真がスライドされる。

「あ、ほんとだ、作ってる。作ってくれてる」

C 妹はティッシュに手を伸ばす。

「お兄ちゃん知らないだろうけどさ、母さん、わたしにはときどき出してたんだよね。母親やるのがしんどいところ。たまに言ってたもん。あんたも子供産んだら、自分のことなにもできなくなっちゃうよ、とか。そういう呪的なやつ」

「ハハハ、呪いか」

父さんは言葉の可笑しさに反応しただけで、きつとその意味はわかってないだろう。

「でもわたし、まだ子供だったし、そんな風に言われても反感しかわなくて。ほら、子供って、自分のためになにかしてくれてる母親が好きじゃない？ 自分に意識が向いてないと、それだけでむくれちゃうの。いまなら母さんの

気持ちもわかるんだけど。母さん、本当はほかにいろいろやりたいことあった人だから」

そう、それは知ってる。母さんはおれたちが学校に行っている間、よく美術館とか行ってた。映画館にもしょっちゅう出かけて、いろんなのを観てた。本もたくさん読んでたし、ありとあらゆるSNSに、自分の気持ちを吐き出した。たった一度だけ、なにかの雑誌に母さんの書いた文章が、活字で載ったことがある。あのときの母さんは、まるでオリンピックで金メダル獲ったくらいの喜びようだった。

「だけど、こんな風にわたしたちに、がんばってプリン作ったりとかも、してくれてたんだね」

台所でプリンと格闘する母さん。料理は下手だった母さん。

「でもそのこと、わたしは写真見るまで憶えてなかった。というか、写真見ても、思い出せないや」

そういうことは多い。

ニコンは、おれたちが育っていく過程の、ありとあらゆる瞬間を記録してくれる。写真という証拠を残してくれる。だけど肝心の記憶の方はどうだ。おれたちはなんでも

忘れて生きていく。自分たちの頭の中の記憶装置に、写真みたいにくっきり残っている瞬間の、少なさ、頼りなさ。ニコンがせっせと記録してくれた写真を見ても、大半がピンともこない。そしてせっかくニコンが撮った写真も、見返すことなく死蔵されている。

「おれ、ニコンっている意味あんの？ って思ってたけど、
① いてくれてよかったな」

おれはこのときようやく、ニコンの存在価値に気づいたのだ。誰かが死んだとき、ニコンが残してくれた写真は、この上ない慰めになる。写真は、あればあるだけよかった。

翌日、キャリーケースに荷物を詰めて玄関に降りると、妹が見送りに来た。

「たまには帰ってきてよね」

「おう」

「父さんの相手、一人じゃきついんだから」

「ハハッ」

妹が結婚もせず実家で父親の世話に明け暮れるのは、正直ちよつと心配だ。けど、そういう話をしたらどうせまたケンカになるだろうから、触れない。おれはこの調子で、

家族との対話から逃げつづけている。

「赤ちゃん生まれたら見に行くわ。ニコンも連れてく」

「おう」

ドアに手をかけたその瞬間、

「お待ちください」

ニコンが紙袋を提^さげてバタバタと小走りにやって来た。

体中が金属だから関節が全然曲がらない、例のカクカクした動きでおれの前まで来ると、紙袋を差し出した。

「こちらを」

紙袋はずつしりと重い。

「なに？」

「わたくしが厳選いたしました母上様の決定的瞬間でございます。こちらは卒園式の正装写真、それから若く美しい母上様のポートレイト、中期の母上様の貴重な笑顔、晩年の母上様の温泉旅行スナップ、それから遺影^{いんげい}に選ばれた栄^はえある一枚も。すべて写真にピッタリ合ったフォトフレームに入れてあります」

まさかこんな、おせっかいなおばさんの気配りまでできるとは。

②「ニコン、お前、もうロボットの域、超えてるな」

ニコンは照れたように、

「わたくしは家庭用人型写真ロボットの第三世代にあたります。心が動いた瞬間、自動的にシャッターを切る機能に加え、このようなアフターケアもできるよう、自らネット接続してフォトフレームの発注なども可能なのでございます。チーちゃんが亡くなったときはフォトフレームを大量発注して写真を部屋中に飾り、母上様にやりすぎだと叱^{しか}られましたくらいです」

「わかったわかった」

おれはニコンの言葉を遮^{さへぎ}って言った。

「わかったけど、こんなにいらねえわ」

「そうですか……」ニコンはがっかりしている。

「これだけ、これだけもらって行くから」

おれは中から、卒園式の写真を選んだ。母さんとおれが二人で写ってる写真。幼稚園^{ようちえん}の門の前で撮ったやつだ。

「アラ……」ニコンはしよんぼり。

「なんだよ」

「残念ながらこちらの写真は、わたくしが撮ったものではないです。すでにどなたかが撮った写真を、わたくしがデータごと引き継^ついだだけのものでして」

そうだ。この時代はまだ、ニコンがうちに来ていないはずだ。

写真をのぞきこんだ妹が言った。

「父さんが撮ったんじゃない？」

「なんでわかるんだよ？」

「状況じょうきょうからして普通そうでしょ」

妹は、そこに気配きはいすらない父親の存在を断言した。幼稚園の卒園式。母親とおれが、あらたまった様子で門の前に立ち、まぶしそうに笑っている。ぱっと見は母子家庭だ。でも、二人の目線の先でカメラを構えている父さんの姿が、妹には視みえたのだ。

「そうでございましょうね」ニコンも言い切った。

「わたくしども家庭用人型写真ロボットを作った技術者は、メーカーに勤務する父親たちでした。彼らは長年、シャッターを押す側おでして、家族写真に入り込むのが立場的に困難でした。もちろん、ここぞという場面では人に頼たのむことは可能ですし、自撮り棒だってあります。しかし、往々*にして父親はシャッターを押す係になりがちでございまして、それが開発のきっかけとなったと聞いております」

家族写真における、父親の不在問題か。

そう考えると、ニコン以前の家族写真は、ほとんど全部、父親が撮ったような気がしてきた。家族の輪の外で、父さんは「こっちこっち」と手を振りながら、カメラを構える。「おれも、ニコンみたいな家庭用の人型写真ロボット、買お

ひとりごとみたいに言った。

するとニコンは、

「まあ！ ロボット冥利*みょうりに尽きるご発言。大変うれしく存じます。現在発売中の第七世代は、わたくしどもよりも小型化が進んでおり、宙を飛べるポケモン型が人気とか。飛べるので構図が自由自在なのが最大のセールスポイント、人気写真家のフィルター機能*もさらに充実しております。蜷川実花モード*ながわみかや川島小鳥モードが標準搭載とうざいされておりますので、どんな人でもおしゃれな雰囲気ふんいきで大事な思い出を残すことが可能です」

^E「いや、普通でいいよ」おれは言った。

フィルターで家族写真をこじやれた感じに変えて、自己満足みだに浸るような親にはなりたくない。普通の写真でいい。家族以外の、誰にも見せなくていい。

そこへ父さんが、

「なんだ、もう行くのか」

と言って現れた。

「あ、いいところに来た。三人でそこ並んでよ」おれは言った。

「ん？」

家の前に父さんと妹とニコンを三人並ばせ、スマホのカメラを向ける。

「ああつ、それはわたくしの仕事ですのに」とニコン。

「うるせえなあ。いいんだよ」

おれはなかなかおとなしく並ばないニコンの両肩りょうかたを押さえ、しつかり立たせた。

ニコンは家族も同然なのに、そういえば一緒に写った写真が一枚もない。

おれが三人を撮ろうとスマホを構えたところを、ニコンはカシャリ。

「おい、いま音したぞ。また撮っただろ」

「すみません、しかしながらわたくしは——」

「心が動いた瞬間を」

妹と父さんとおれ、全員が同時に、聞き飽あきたそのフレーズを暗唱した。

「心が動いた瞬間を！」

（山内マリコ「心が動いた瞬間、シャッターを切る」による）

【注】

* 死蔵——活用せずにしまいこんでおくこと。

* 赤ちゃん——まもなく生まれるおれ（兄）の子。

* 往々にして——しばしば。度々。

* 冥利に尽きる——これ以上の幸せはない。

* 蜷川実花・川島小鳥——人気の写真家。

問一 ―線部A「妹は悲しげな表情でくり返した」とあるが、このときの妹はおれ(兄)に何を伝えたかったのか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 病氣と闘^{たたか}っている母を励^{はげ}ますための花を飾ることも無駄^{むだ}だと考える病院に対する抗議^{こうぎ}。
イ 母の病状を心配するよりも、病室の値段ばかり気にして入院費を節約しようとする兄に対する怒^{いか}り。
ウ 本当は帰りたいのに母のそばに付き添^そっている苦勞を理解してくれる人がいないことに対する不満。
エ 花も飾ってはいけない殺風景な病室にいる母へ、家族なのに何もしてあげられないことに対する嘆^{なげ}き。

問二 X にあてはまることばとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 感情 イ 空気 ウ 時間 エ 表情

問三 ―線部B「こういうところ撮るなって」とあるが、なぜ「撮るな」と言っているのか。「こういうところ」とはどのようなところなのかを明らかにして説明しなさい。

問四 ―線部C「妹はティッシュに手を伸ばす」とあるが、妹の気持ちも含めて、その理由を説明しなさい。

問五 — 線部 D 「あのときの母さんは、まるでオリンピックで金メダル獲ったくらいの喜びようだった」とあるが、このときの「喜び」とはどのようなものか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 家事や子育てで忙しい中書いた自分の考えが、認められたことに対する喜び。
イ 家族は認めてくれない自分の教養を SNS で広く発信することができる喜び。
ウ 雑誌に載ったために、家族に反対されずにやりたいことができるという喜び。
エ 自分の書いた文章が金メダルを獲得したことで周囲の人から誉められた喜び。

問六 — 線部 E 「いや、普通でいいよ」とあるが、おれ(兄)にとっての家族写真とはどのようなものなのか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 家族写真とは有名な写真家の真似ではなく、撮る人の個性を一番大切にするもの。
イ 家族写真とは見栄えを気にした加工などをせず、ありのままの家族の姿を写すもの。
ウ 家族写真とは家族のためのもので、けっして軽々しく他人に見せびらかしてはいけないもの。
エ 家族写真とはおしゃれな雰囲気で自己満足に浸るよりも、誰もが好感の持てる家族を描くもの。

問七 — 線部 F 「ニコンはカシヤリ」とあるが、このとき、ニコンは誰のどんな心の動きをとらえたのか。説明しなさい。

問八 〰 線部 ① 「おれはこのときようやく、ニコンの存在価値に気づいたのだった」、② 「ニコン、お前、もうロボットの域、超えてるな」とあるが、〰 線部以前と比べて、ニコンの存在価値はおれ(兄)の中でどのように変化したか。七十五字以内で説明しなさい。